
パンドラの箱

Mr.タニシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パンドラの箱

【Nコード】

N6366X

【作者名】

Mr.タニシ

【あらすじ】

パンドラボックスというものを御存じだろうか。パンドラボックスとは中に悪を封じ込めた禁断の箱の事だ。蓋を開けると中から悪は飛び出し、世界に不幸や呪いをばらまく。

とまあ、お伽噺はここまで。こんなお伽噺はしょせんフィクション。箱を開けなくても世界は不幸や理不尽で溢れ帰っている。でも、もしお伽噺が現実だったら？ 主人公の九頭正義はある日その事を知ってしまう。世界の裏側。魔術や妖術の類いの世界に足を踏み入れたらもう帰れない。ハンプティードンプティーは塀から落ちたら二

度と登れないのだから。

エピソードとプロローグ

九頭 正義（くずまさよし）は世間一般で言うところの一般市民であり、どこにでもいるただの少年である。朝、目覚めると大学へ登校して夕方になると帰る。そうして家についたら夕食を家族で食べて、夜になったら寝る。そしてまた朝が来れば同じことの繰り返し。そうやって人生の大半を過ごしてきた。それは今日も同じだった。

地下鉄のホールで帰りの電車を待つ彼はポケットに両手をつ込んで過ぎ去る回送車両を見送っていた。耳に差したイヤホンからは一昔前に流行った音楽が流れ続けている。

「おー、寒い寒い。冬の地下鉄は寒さがダイレクトにくるわー。」

再生する曲を入れ換えながら呟いた。端子が刺さる携帯は最先端の機種でタッチパネルで操作するタイプだ。反応が悪くなるので手袋を外して操作しなければならないので指先がかじかむのが分かる。

「二番線に電車が到着します白線の後ろへお下がり下さい。」

スピーカーから機械の音が流れるのに反応して彼は顔を上げた。丁度立っていたのは白線ギリギリだった。

トンネルの奥から段々と光が近付いてくるのがわかる。最初の頃は電車通学への憧れから新鮮に見えた光も、今は見慣れた日常の風景だ。違った事は一度もない。

プシューと排気音が聞こえたのと同時にドアから人が降りてくる。

電車が来た時の風圧で短い黒の髪が風になびいた。

「おっと……」

流れる人にぶつからないように気をつけて乗り込むとすぐに空いている席へと腰かけた。そのまま電車は動き出すとゆっくりとホームの景色が流れていくのが見えた。

だんだんとホームの明かりが遠くなり消えていく。やがて明かりは見えなくなつて、トンネル内は暗闇に包まれた。薄い暗闇の中で耳元のイヤホンからの音楽だけが脳内に響いている。

— Do you see the light —

汝は光を見たか？ という歌詞を聞きながら流れていく暗闇を見送っていく。今日も（俺の）世界は平和なもんだ。と鼻唄混じりに手元の英単語リストに視線を移して次のページを捲った。

電車の登下校の時間は勉強に充てるにはとても丁度良い。なぜなら俺が乗り込む時間は大抵空いているからだ。

パラパラとページをめくるうちに最後のページにたどり着いてしまい、次の物を取り出そうと鞆を引つ掻き回した時、ある事に気づいた。

無い、確かに入れておいた単語リストが。ふと鞆の底を見ると僅かだが穴が空いていた。ノートや筆記用具なら落ちないだろうが、小さな単語リストが落ちるのには十分すぎる大きさだ。

「はぁ、ついてないな」

ため息をついて俯いた瞬間、小さな紙の束が視界の端にとらえられた。なんだ、少し離れた場所に落ちてるじゃないか。前言は撤回しよう。

すぐに拾って続きを勉強しようとした。だけどそこで彼の目に入ったのは英単語でも、まして裏に書いた和訳でも無かった。

（なんだこりゃ？　どこの言葉？）

書かれていたのは近頃ではゲームやマンガで見かける梵字なのだがそれを正義が知るよしもなく、ただただ眺めるしかなかった。ここで普通の人がとる行動とは何か。物語の主人公なら親切に落とし主を探して返すか、もしくは自分で持つておくだろう。でも現実はどうじゃない。

正義は自分のものでない紙切れに時間を割くほどお人好しでも無いのだから。どうせ外国語大学の生徒が落としていったのだろう。そう考えると紙束を窓の枠の上にそっと置いた。しかし、はて？　この辺りに外大なんてあったかな？　などと考えるも思い当たるものはない。と言うよりも自分の事以外に興味の無い彼にとってはどうでも良いことなのだった。

やがて電車が目的の駅に到達した所で、単語リストを諦めて正義は下車した。そのまま歩いて行く彼と反対して、出発する電車内で正義が窓枠に置いた紙束を拾う男がいた。

「……あつたあつた。全く、こんな日に限って落とすとはな」

無精髭を生やした男は呟くと懷に紙をしまつ。それを見ながら、いつからいたのか傍らに居る女が諭すように話した。

「普段から管理がなつてないから落とすんですよ。先輩。これを機にそのだらしない無精髭剃っちゃつたらどうですー？ 絶対イケメン度が二割増しだと思うわけですよー」

妙に間を伸ばす話し方をする女に男は呆れたように反論を返した。

「元はと言えばてめえが、乙女の支度には時間がかかるんですー、とかほざいてギリギリに出発したのが原因じゃねえか。つか髭は剃つても二割増しなのかよ。なに？ 暗に似合わないって言いたいのかなあ？」

「違いますー、先輩がミスしなかったら間に合いましたー。なので責任は先輩ですー。それと髭の件は暗に何て言つてません。ハッキリダサイですよー」

「てめえ！ 言いやがつたな！ 髭は渋い男の勲章なんだよ。それを言つならてめえも何が「乙女」だよ。歳言つてみろや！」

「…はあ？」

一瞬にして女が纏う空気が変わるとともに口調が合わせて変化した。歳の事は彼女の琴線でありタブーのようだ。

「まあいいや。それはそうとさ？ 駅過ぎましたけど。どうする？」

「ちっ、面倒くせえ女。次で下りて車捕まえんぞ」

「はい」

口調は先程より軽くなってるが目が違う。それが面倒なのだが当の本人は分かかってやってるのもまた面倒なのである。二つの意味で面倒な話を逸らす、というより元の路線に切り替えたのだが、それで事なきを得る。この女、見た目十代前半だが中身はまるで別物なのである。

コンクリートで舗装された道路。その上を革靴がカツカツと音をたてる。規則的にたてられる音は住宅街特有の静けさに紛れて次々と消えていった。

もう駅から20分以上歩いた所で正義はある事に気づいた。

「あー……しまった。舞に帰りにコンビニで髪止め買ってきて、って頼まれてたっけなあ」

コンビニは確か五分ぐらい前に通りすぎたはずだ。そう思い来た道を引き返した。このあたりにはスーパーやらの類いは殆んど無く、コンビニ兼日曜雑貨店が一つあるだけ。なので必然そこに行くことになる。妹の舞は付近の中学に行っているが、部活で帰りが遅く学校は店から遠い。なので帰る頃には門限は過ぎているので度々自分がこうして買い物を頼まれるのだ。

店に入ると手早く目当ての物を探しだし、ついでにジュースを力ゴに入れてレジに向かった。ふと店内に飾られた時計に目をやると時計の針は8を指していた。早く帰らねば、と思いお釣りを受け取

り店を出た所で脇からタクシーが出てきて轢かれそうになった。狭い道なので仕方無いのは分かってはいるがそれでも気を付けて欲しいと思う。これが地元の人間なら道を分かっているのでこんな事は無いのだが。まあ結果無事なのだからこれ以上は言うまい。帰路を急いでその場は軽くぼやいて終わりにしたのだった。

——家の前についたのはその後15分後だった。この時間だと家族はもう夕食を食べ始めているかな。玄関を開けると靴が五足並んでいる。見慣れない靴が二足あった。

「ただいまー」

来客？ この時間に珍しい。いつもならすぐに妹が顔を出すのだが、人が来てるのなら出迎えないのも自然か。靴を脱ぎながら来客の靴を良く見ると二足とも革靴だった。それも素人目に見ても高いと分かる。

（親父の知り合い？ ならこの時間に来たのも別に变じゃ無いか……）

「ただいま、誰か来て……」

扉を開いた所で指が止まった。水を打ったように静まり返った様な室内。まるで時間が止まったのかと錯覚するほどに硬直した体。それに反してめまぐるしく揺れる視線。

「なんだよ……。なんなんだよこれ……」

止まった部屋の中、テーブルに置かれたグラスの中で氷がカラ

と音を立てた。誰も動くことのない中、唯一時間の経過がそこから分かる。いつからそこでグラスは放置されたのか、時間を示して。

「なんなんだこれはあああああ！！」

室内には家族三人分の血と肉が飛び散って、部屋全体を赤く染め上げていた。まるで赤い箱みたいに。

パンドラの箱

電車を降りた後、タクシーを拾うとすぐに二人は目的の場所へ向かった。山を切り開いた土地は住宅街が並び、どこを見ても家ばかり、すると急にタクシーにブレーキがかかった。どうやら人が飛び出してきたらしい。

「すみませんね、お客さん。この辺は道が細いし入り組んでて厄介なもんでして」

申し訳なさそうに運転手は苦笑いをしながら言った。

目的の家に着いたのはあたりがぐらぐらになった後だった。家の中に入るとすぐに家人の搜索をした。そこで居間の惨状に出会ったふたりは出遅れた、と舌打ちした。

「やられましたねー、入れ違いになったとは残念です。手口も同じですし完全に奴等ですね」

「……………《パンドラの箱》だな」

忌々しそうに男が吐き捨てた。あと少し早ければ助けられたのに。何故か毎回入れ違いになる。奇っ怪な事に毎回到着した時には終わっているのに二人は苛立ちを感じていた。

他になにか犯人の手掛かりを探して二人は二階を探すことにした。

家内を包み込む静寂の中、家捜しをする音だけが響く。丁度例の

部屋の真上の部屋の中を見て回っていると男の方がある事に気づいた。

「なんか配置が……………変？」

わずかにだがホコリの跡と置物の位置がずれているのだ。改めて部屋を観察すると床にも異変があるのに気がついた。

「あら、何か焦って消した痕跡が残ってますねー。ほら、チョコクの粉がうつすらと」

指に付いた粉を見せながら女が言う。確かに床にも跡が残っている。ここで何かをしたのは分かった。それに陣を書いたのならある程度の方向性も。だけどそれを考えるのは俺の仕事じゃない、専門の部署のだ。そこまで考えた瞬間、階下から叫び声が聴こえた。

「なんなんだこれはあああああ！！」

悲痛な叫びが聴こえた時点でタイムオーバー。組織の仕事は一般人に見られてはならない。

「おい、誰か来たみたいだ。見られんうちに帰るぞ」

了解です。とばかりに女は頷くと先に下の階へと降りていく。さりげなく後始末を押し付けられたとわかって男のこめかみがひくつくいたのは仕方が無いだろう。

——日がどつぷりと沈んだ頃。町の寂れた裏路地をある男が歩いていて。男は司祭の着る黒いリヤサと呼ばれる衣を纏い、胸にかけた十字架が歩くたびに揺れている。携帯のバイブレーションに気づいた男は携帯を取り出すと通話相手に語りかけた。

「計画は順調だよ、ミスター黒山」

「おっと、いきなりだねえ。あんたらしいっちゃらしいが。誰にも見られてないよなあ？」

「ヘマをやらかすような三下ではないと自負しているがね」

「神器の作成は？」

「とどこおり無く終わった、今から持つて帰る」

「それを聞いて安心したぜ。それと本題だがこないだまで使ってたアジトが潰された、敵さんも本腰入れて潰しにかかってるぜえ？ 次のアジトに俺等が行つとくからお前も来いよお」

プツツと通話が途切れた所で携帯をしまい。今回の目的だったそれを取り出す。小さなナイフの形をしたそれは特殊な条件下でのみ作れる悪しき神器。

条件とは即ち決まった星の並び、時間、場所、そして人の血肉と魂。

邪法で造られた刃はくすんだ黒色をして、禍々しく光を反射している。これ一つのために何人も人間が惨たらしく殺されている。

ああなんと美しく。

そして狂気を孕んでいる。

武骨な形のくせして、まるで一種の芸術品のよう洗練された魅力がナイフを包み込んでいる。その上――

（喰わせろ）

地の底から響くかのような低い声が響いた。出所はナイフというのがなんとシユールだ。

こいつは生きている。

魂を喰らい、所有者の欲望に合わせて限りなく強くなる魔装。計画は始まった。

「主の御心のままに」

十字架に祈りを捧げ、歩き出した彼の目には少しの狂気が乗り移ったかのようにだった。

ざあざあと雨が降るなかで、葬儀は粛々と執り行われた。

諸事情があつて、親戚が家族だけしかないうちの葬儀は、両親の知人や、家族ぐるみの付き合いがあつた友人がチラホラと参加するだけの小規模なものだった。

頬を打つ雨が伝つていく冷たさを感じながら墓の前にたたずんでいる俺を見て、葬儀に参列した大人が、噂するのが、いやに耳に残った。

『あの年で一人だなんて可哀想ね……………』

『なんでも犯人はまだ見つかつてないらしい……………』

『死体に傷が無かつたとか……………』

『ほんと？ 気味が悪いわ……………』

ぺらい同情を口先だけに並べる大人に嫌気がする。

面の皮が厚い大人が、うわべだけのお悔やみを言ってくるのが、妙に堪えられない。

いや…………… 本当の所はそんなのどうだっていいんだ。

『正義、今日の晩御飯何が良い？』

『ん、なんでも良いよ』

やっぱりカレーが良かったよ、お袋。

『お兄ちゃん、また髪留め買ってくるの忘れてる！』

『うっせ、明日買ってくるから文句言うな』

髪留め、忘れてごめんな舞。

『正義、お前には父さんみたいに警察になって、市民を守る正義の味方であつて欲しいな』

『正義の味方つて……………いい歳こいてダサイよ』

親父、仕事に行くときの親父カッコよかったよ。

「……………つく……………うう……………」

気づくと涙か溢れて頬を伝っていた。
もう話すことはできない。言っていないことが色々あったんだ。なのに……………

「正義……………」

「優人？ すまん、今は一人にしてくれ」

「あ、ああ……………ごめん。何かあったら連絡してこいよ。いつでも良からさ」

優人は以前から家族ぐるみの付き合いがあった内の一人だ。俺の関係者だと、参列してるのはあいつくらいだ。

でも今はあいつすら会いたくない。一人で心を整理したいんだ。胸にぽっかりと空いた穴は時間が解決してくれる……………と思う。

その後、式は解散し、どうやって帰路に着いたのかもわからずに家に帰っていた。部屋に一人でボーッと過ごす。今は何も考えたく

な
か
っ
た。

ようこそマッドハッター

葬儀が終わった夜。正義は部屋の明かりも点けずに、リビングで一人、床に座っていた。フローリングの床から伝わる冷気が体を冷やすのが分かる。物理的にも。心理的にも。

部屋のなかはとうに、片付けられ、見た目には綺麗な状態を取り戻している。しかしこびりついた臭いが未だに鼻腔をつく。

ずっと一人で考え事をしていると、事件直後の事が思い出される。無我夢中で警察を呼び、警察が到着した後は取り調べを受けて、混乱しているなりに状況を伝えた。

その後の警察の態度だが、彼が期待したほど警察の対応は芳しくなかった。その原因は単純だった。

「……何もわからない？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6366x/>

パンドラの箱

2011年12月1日02時50分発行